二人で話せば…人生はおもしろい

来栖琴子

来栖琴子（くるす　きんこ）

1924年中国（旧満洲・安東）生まれ。
ＮＨＫアナウンサー，ＴＢＳアナウンサーを
経て，現在フリーライター。
著書に，『婦人ニュース奮戦記』（読売新聞
社）『女がそとで働くとき』（水曜社）『とも
ばたらき入門』（水曜社）『女性のための話し
方専科』（白石書店）『話しベタがなおる本』
（学陽書房）などがある。

二人で話せば…人生はおもしろい　　定価はカバーに表示してあります

1987年２月10日　第１刷発行©

著者　来栖琴子
発行者　白石舜市郎
印刷所　文栄印刷
製本所　坂本製本

発行所　白石書店
〒101　東京都千代田区神田神保町１—28
電　話 03（291）７６０１

0081—0150—3355

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

もくじ

話のいとぐち　7

1　二人で話せば人生は楽しい

家族は二人だけ――夫婦の会話、朝から晩まで　17
レストランでのおしゃべり　20
午後のひととき――説得はソフトタッチで　22
電話をうける・かける　24
よその夫婦　うちの夫婦　26
夜の語らいはボーリング場で　29
親しき仲にもサンクチュアリ――言葉の〝聖域〟　33
初対面の人と話すには　36
ボタンのかけちがい――相手がだんだん遠くなる　38
美人と十円玉　42
私を支えたあの時のあの言葉　44
心に残ることば・言いまわし　46

2　がやがや話せば人生はもっと面白い

楽しいレクリエーション――出発進行！　53
社員旅行の夜　55

同窓会、妻同伴――お供の気楽さ　58
夫同伴同窓会、顚末記――まだ発展途上人らしい〝おんな〟　60
笑いをつくる演出も　64
子どもには人格を認めて対等に　66
バレンタインデー殺人事件――匂いのエチケット　68
会食の話題　70
ふだんが肝心、エチケットの基本（男性専科　Ⅰ）　72
日本男子に一言（男性専科　Ⅱ）　74
森・森コンビの結婚披露宴から――　76
「こんにちわ」は気安いあいさつ　78
質問にはタイミングが……　80
お通夜は「かけつける」もの　83
お隣りの奥さんと――近所づきあいのコツ　86
接客サービスのヒント――伊勢路の旅から　88
お客さまとうまくつきあう法　93
私の恥かき物語　96
さまざまな出会い
くどき上手・のせ上手　103
朗読奉仕の楽しみ、悩み　107

3

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

手話入門――「おあいして、嬉しいです」 110
聞こえる子・聞こえないお母さん 112
待つ身よりも待たれる身に 116
旅は道づれ　ルームメート 118
「一路平安（イールーピンアン）」残留孤児の臨時ママになって 120
「駅前やきそば」三恵ちゃんは多芸多才 124
長野県東筑摩郡、坂北村――ポーラレディの久保田さん―― 128
七十六歳現役の心意気 130
いってらっしゃい――フクさんレクイエム 133

4

琴子のひとり旅・ひとりごと
旅がらすの記 141
わたしの好きなコーナー――上野駅―― 145
地方紙から拾う 149
隠岐の小出刃包丁 153
隠岐の島の三日間 154
住田で聞いた話――方言の味 157
砂丘をながめる 159
忘れられた布団 163
肩書は〝婦人問題勉強中〟 166

〝主婦〟という肩書　168
「深夜の友は真の友」――真夜中のラジオ　170
長い〝おわりに〟
〝ゆたかさ〟を求めて　175
〝モルモットばあちゃん〟の宣言　180
あこがれの〝お掃除のおばさん〟になって　184
定年後八年　189
百姓一揆との出会い　191
〝話し方〟に再びこだわると……　193

話のいとぐち

「アナウンサーらしくない、アナウンサー」

あまり名誉ではない評価をいただいて、かれこれ三十年、マイク片手に暮らしてきました。

その間〝オビ〟と呼ばれる、月曜日から土曜日までのナマ番組を担当したのは、テレビとラジオを合わせて延べ十六年。週休二日制が普及したのは、私がアナウンサーをやめてからですから、日曜以外は休めない、日曜出勤をしたら代休はとれないという、きびしい働き方でした。「延べ」ととくに断ったのは、ラジオとテレビ両方で一本ずつ、毎日、放送していた時期が三年ほどあったからです。

その間、風邪をひいて休んだのが、たった一日、丈夫なのも〝芸〟のうちです。時計の針に追いかけられ、秒単位でものを考えながらも、心身ともにボロボロにならなかったのは、「アナウンサーらしくなかった」からだと、このごろ分かってきました。

「アナウンサーらしい」とはどういうことかといいますと、ソツのない態度、ととのったことばづかい、加えて容姿端麗、才気かんぱつ、打てば響く利発さ、などでしょうか。すべて縁がなかっただけに、スタッフのみんなに助けられ、支えられて、ごく〝自然体〟で生きられたから、担当番組は十三年とか、八年、六年と長続きしました。

ズバリ言うと、下手なアナウンサーだったのですが、それが時代を先どりしていたように思われます。テレビやラジオの、素人全盛時代はかなり長続きしています。滑らかに舌の動く、レポーターやキャスターも活躍していますが、同じくらいの素人っぽいキャスターが、オドオドしたりヘドモドしたりしながら、それなりの魅力をふりまいています。真実みがある、誠実な感じ、という印象が、〝したり顔〟のアナウンサーより、視聴者の共感を得られる場合もあるのでしょう。

話しかたとか、言葉について考えるとき、話以前のものについて語るほうが魅力があります。たとえば話し調子です。

「あの人の看板は〝泣きぶし〟でしょ、だから同性にうけるのよ」

仲間うちでは、こんな言い方をよくします。女性の評論家や作家で、

「わたくしは、この子たちのことを思いますと、どうしてもほってはおけないのです」どちらかというと、細いきれいな声でむせび泣く一歩手前のような語り口は、説得力があります。そうとう難しい理屈をこねても、男性はもちろん女性の聞き手からもはんぱつされません。「かわいそう！　助けてあげたい」気がするからでしょう。

また、少し上から〝見下ろし型〟もいます。新進気鋭のウーマン・リブ派、キャリア・ウーマンに、ときたま見られるタイプです。芯は温かいものを持っていながら、

「ほう、そうですか。それで……じゃあ、お困りになるんじゃございません」

語尾がピリッと上がって、知的ですが、「アンタの負け」といわれたみたいに、カッカとしてくる相手もいるでしょう。

あなたの話し調子は、どちらですか？　たぶんどちらでもなく、そのときどきによってニュアンスのちがいがあるのが普通です。相手がパキパキしていれば、のらりくらりがふさわしいかもしれないし、その逆もあって、パキパキと調子を合わせないと、「ワン・テンポずれちゃうのよ。困っちゃう」と嫌われます。言葉を選ぶのも大切ですが、相手にどの角度で立ち向かうか、姿勢をきめる必要もあるようです。

この本の中には、商店やサービス業の方向けに、接客話術もかなり書いてあります。都会では女性の職場として、コンピューター関係や、語学を使うものとともにカタカナの職業が増えました。その中の一つにハウス・マヌカンというのがあります。ブティックの販売員のことですが、女性の職業として今まではあまり陽が当たらなかったようですが、このごろは、数では非常におおい部分にスポットがあたりはじめたように見えます。そのハウス・マヌカンの言葉が面白いのです。

「あーら、似合うんじゃない？　着てみれば」などといかにも気安いしゃべり方がほとんどです。娘と話をしているようで、私は好きですが、「まあ失礼な、いやしくも客なのよ」

と怒る奥様もいます。でも、売る立場と買う立場が、同じフロアになった点を私は高く評価しています。銀行やデパート、飛行機のスチュワーデスなどの丁重さは、自分がえらくなったようで、しばし幸せにひたるのですが、見えないところでは、舌を出しているかもしれない、その裏には尊敬も何もない虚構の世界だと思うと妙な気分になるのは、多分私ひとりではないでしょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

マナーとか、エチケット、お行儀はタテマエのもので、「ホンネをどうかくすか?」を学ぶのではなく、ホンネをタテマエに近づけながら、人と人の間の摩擦をなくして行くもの、という風に私は考えています。ですから、ハウス・マヌカンの話し調子を支持しているのです。

夫婦・親子は心が通い合っているから、ホンネむき出しでいいと安心しすぎて、家庭に波風が立つ場合もあるし、喧嘩をしても簡単に仲なおりのできるよさもあります。そこで身近な家族との会話をまずマナイタに乗せて、そこから近所づきあい、友達同士の会話などとひろげて行ってみました。

また、話以前の問題になりますが、家族の間でも、オフィスでのベテランと新人の間でも、「コミュニケーションがうまくいかない」という悩みをよく聞きます。不思議なことに、問題点が一致していて、「話を聞いてくれない」なのです。それも昔話や愚痴ではなく、用事の連絡です。短い会話がストレートに通じないというのですから問題です。

「××さん、○○さんからお電話です」

「昨日の報告しといてくれ、おわったら私が出るから……」

「はい」

そこまではハキハキしている若い社員ですが、自分が話し終わると電話を切ってすましています。

「後から出るって言っといたのに」と恨みがましく言う上司に対して、「すみません」と一応は謝るけど、ケロリとしているのが、理解できません。

ことばの持つ力の弱さを感じさせられる場面です。それが日常茶飯事なのだとこぼす、課長さんや部長さんの話が珍しくないのです。

ところが、そのベテラン社員の家庭では、

「夫に大事な話をするタイミングが難しいの。勤めから帰ったばかりだと、疲れているのにごちゃごちゃした説明は聞きたくない、って言うでしょ。もっともだと思うから食後に話そうとしてると、テレビの野球を見はじめて、何をいっても生返事、『そんな話は聞いてない、テレビを見ている時に言うほうがバカだ』って、あとで文句をいわれるのよ」

「お宅もそう？　うちの亭主より十歳もお若いのに。いえうちは早くもボケがはじまったかと、がっかりだったんですよ」

地域の婦人学級では、この話題になると皆の意見が合います。

こちらが何かを伝えようとする誠意と、相手が聞く耳をもっていれば、タイミング、魅

力的な表現、声の大小、話しかたの緩急などなど、工夫の余地はまだまだあるでしょう。そういうことを雑談的に話すつもりでこの本を書きました。

話すことが楽しくなるために、まず客観的に自分の話しぶりを、朝から夜までゆっくりと眺めて見るところから、話の勉強をはじめてみました。

1 二人で話せば人生は楽しい

核家族の時代です。新婚・旧婚、親子など、
二人で話す機会が多くなるでしょう
とくに、子どもたちが巣立ったあとの家
の中での、軽い楽しい会話を考えてみ
ました

また、職場で街角での、二人の会話も……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c